

ユダヤ・イスラエルに思う④ キブツは今

長谷川 修

イスラエルにバック旅行の二日目、ガリラヤ湖畔の宿に泊まった。ガリラヤ湖一帯は、山上の垂訓やイエスの奇跡譚、ペトロ達との出会い等、キリスト教誕生の中心地である。我々も湖をクルージングし、ペトロも釣っていたという淡水魚を食したが、案内してくれたのが「キブツ」が経営する旅行社と聞き、懐かしくも驚いた。

キブツ（ヘブライ語で「集団」と言えば、我々の学生時代、ソ連の「ソホーズ」、中国の「人民公社」と並んで、世界の代表的な協同組合だった。中でもキブツは、財産の共同所有、身分の平等、機会の均等、子供の集団育成をとっており、ユートピア社会主義の理念―能力に応じて働き、必要に応じて受け取る―の具現化だった。一方、建国のバックボーンであるシオニズム運動とも連動しており、キブツは開拓農業、食料増産の担い手であるとともに、軍事基地、民兵組織でもあった。キブツからは首相を初め政府高官や軍指導者を多く輩出し、また第一次中東戦争（独立戦争）における犠牲者の割合は高かった。

二十世紀の第四・四半期、ソ連の崩壊によりソホーズが、中国の市場経済導入により人民公社が解体されたが、同じころキブツも危機を迎えた。産業の高度化による財務の悪化と流出者（脱会者）の増による働き手の減少である。八〇年以降にとった対策としては、一つは非農業分野の拡大による増収であり、食品、化粧品を生産、プラスチック加工業、観光業等に進出した。二つめは、キブツによって差があるものの、一部財産の私有や外部での給与受給を認め、家族単位での子育ても取り入れている。また人手対策として外部労働者の雇用もあって、キブツの原則である平等主義や搾取の廃止から外れた部分が増えている。

現地在住の案内人Sさんは、子供のころ家族で日本からキブツに移住し、そこで育った。結婚を機にキブツを離れたが、「子供にとって良い所だった。今のキブツはすっかり変わった」と少し寂しそうに話していた。